

Title	土屋興著 英国労働不安
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.10 (1915. 10) ,p.1203(127)- 1204(128)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19151001-0127">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19151001-0127</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とも義勇奉公を以て國民の最大義務と信ずる(或は聲明せる)我國人をして奇異の感を懐かしめたるものなるも、惟ふに悠悠々々たる英國國民の態度は過去數百年間入寇の苦痛を嘗めしことなき上に殊に奈翁を屈服せしめたる歴史より生ずる自信と自國海軍の優勢に對する信認との醸したるものなる可し。昨年我國が獨逸に對して開戦を布告し青島に遠征軍を送りし際、我國國民の態度は必ずしも舉國一致と云ふこと能はざりしが如し。是れとは程度を異にすれども、歐洲戦亂に参加せる英國の事情は其自信力に於て稍々我國の参加と相似たる所なきに非ず。

されば、我國に於て青島攻撃を非難する者輩出せしと同じく英國に於ても亦戦争参加に對して政府の責任を問ひ、且つ其後に於ける政府の對戦政策に就きて非議論難を加ふる者少からず。マクドナルド、シヨリ、エンシエルの諸氏は其中最も著名なるものなりとす。されど是等論客の如く政府を罵倒することを以て死兒の論を敷ふるものなりとし、彼等とは多少異なる見地に立ちて戦争の原因を講究し、以て將來戦争を根絶せしむるの方策に就きて思索を運らす憂國の人士もあり。吾人が茲に紹介する『戦争是非』の原著ギンソン氏は即ち其一人なり。

ギンソン氏 (Goldworthy Loves Dickinson) は倫敦經濟政治學校

に於ける政治學の講師にして歴史宗教等に關する著述數篇あり。曾てカーン氏旅行獎勵基金の補助を受けて東洋に遊び其序我國に來朝し歸國後同基金監理者に對する報告書として An Essay on the Civilizations of India, China and Japan (印度支那日本文明論)と題する一小冊子を發表せり。此書に載せたる我政治組織の缺陷並に教育方針の瑕玼に對する批評苦言は肯綮に當れる所少からずして、其の觀察力の非凡なるを洞察することを得可し。曾て我國の裏面を英に以て英國に紹介せし日本を知るギンソンの近業が邦文に翻譯せられて邦人に紹介せらるゝは何等かの宿縁に依ると謂ふ可き乎。

本書の原著は題して The War and the War Out と云ふ。譯書は題して『戦争是非』とせるが、原題を直譯せば『戦争と之を避くる方法』とも云ふ可し。著書論旨の骨子は下の如し。

凡そ戦争は人民の欲する所に非ずして、爲政者が勝手に之を企て人民をして餘儀なく血税を拂はしむるものなり。今次の大戦争に就きて云ふも亦同じ。而して斯くの如き悲惨なる戦争の再發を防ぐ爲めには次の二原則を守らざる可からず。(一) 講和の際戦勝國は戦敗國の領土を併呑す可からざること(二) アルサス・ローレン又は波蘭土の如き國際間に葛藤を惹起し易き領土が何れの國の主權の下に置かる可きは各其領

土住民の意志を尊重して定む可きこと。云々。

國民が擧つて反對せる際に政府が他國に對して干戈を動かすこと能はざるのみならず、多くの戦争が結局國民間に於ける利害の衝突に依りて勝致せらるゝものなることは吾人の茲に喋々するを要せざる所にして、ギンソンの戦争論は聊か楯の一面のみを見たる議論なるが如きの感なき能はざるなり。而かも爲政者の野心、軍人の虚榮心、軍艦、軍需品等の供給者の射利心が戦争熱を煽りて以て國際關係をして險惡の状態に陥らしむるに至る是等爲政者、軍人、實業家の責任を呼號せる點に於て吾人はギンソンの裏書せざるを得ず。平和維持策としてのギンソンの領土不割譲論に至りては今次戦亂終局の状態如何に依りては必ずしも其實行不可能と云ふ能はざる可けれども、率直に之を評せば一の理想たるに止まるならん。

要するにギンソンの戦争論は平和論は智よりも寧ろ情より湧出せるものにして従つて興味も亦此に存せるが如し。加ふるに其行文の流暢高雅なる殆んど讀者を魅せんとする所あり。氏の文體の純潔なるはアガソンの夫れの如く、其輕快なるはラスキンの如しと云ふ可きか。

譯書は序文と附言(各二頁)を除きては原書の本文全篇を譯載せり、譯文は頗る輕妙なる口語體を用ひ、其の流暢にして雅致に富める點に於て原文を辱かしめざるものと云ふ可きなり。

### 土屋 興著『英國労働不安』

大正四年九月慶應義塾出版局發行  
四六版三百三十四頁定價金壹圓

本書は最近英國に於て續出せし資本對労働争議の眞相を叙述し、其原因を闡明すると同時に、我國の労働問題解決上參考に資する所あるを期せるものなり。著者土屋氏は慶應義塾政治科出身にして、卒業後操觚者となりて職を大阪毎日新聞社に奉ぜしが、去る四十四年中英國に遊び親しく同國に於ける労働紛議の状態を觀察せり。本書に載する記事論斷は多く

氏が滯英中聚集せし史料及び實見せし眞想を基礎とせり。本書の内容が概して信憑するに足るものなるは之を以ても察知するに難からざる可し。

本書は本文を九章に分ち、先づ第一章「緒論」に於て過去数十年間の労働問題の實状を略述し、第二章に於て千九百十一年―十三年間の労働紛争を詳説し、以下順を追ふて労働紛争範圍の擴大、シンザカリズム、労働不安の原因、労働紛争の原因及結果、労働紛争解決機關、同盟罷業を略述して、最後に第九章「結論」に於て我國も先進國の嘗めたる苦き經驗を繰返へさる爲めに労働組合の設立と平和的同盟罷工を許容し、シンザカリズムの如き危険極まる労働運動の發生を未然に防ぐ可しと切言し、終りに堀江博士が昨年一月大阪毎日新聞に寄稿せし「同盟罷業問題」の一節を轉載して巻を結べり。尙本文以外に本書は巻尾に附録として戦争開始以後に於ける労働の紛争、殊に最近我國朝野人士を驚愕せしめし南威爾西の炭續夫罷業、並に英國の物價に關する三小論文を添へ且つ引用書目を擧げ、又参照に便ならしむる爲めに索引をも設けたり。紹介者は漸く兩三日前本書に接したるを以て、不幸にして未だ全文を精悶熟讀するの機會を得ずと雖も、本書の記事は概ね正確なるが如し。されど著者の論斷、警告、暗示等に至りては勿論讀者間に其感を同じうせざるものなきを保せざる

も、而かも我労働者の幸福を希ひ、産業界の安固を望み、國の安危を深慮する著者の熱情は紙面に溢れて讀者をして思はず戀を正して耳を傾けしむるものあり。之に加ふるに流麗なる著者の文體は動もすれば乾燥無味ならんとする労働問題をば變じて興味津津たる論題なるの趣きを呈せしめたり。今や我工場法の漸やく實施期に入らんさせるの秋に際して労働問題の解決に就きて最も永き且つ廣き經驗を有せる英國の労働争議の眞相を傳ふる本書の上梓せられたるは我學界の爲めに祝す可きことにして、資本家、労働者、工場監督官等を益すること蓋し尠少に非ざる可しと信ず。

### 前號(第九卷)目次 (大正四年九月號)

#### 論說

- 穂積博士の隱居論を讀む(其四) 法學博士 福田 徳三
- 札差に就きて(其の二、完) 文學士 幸田 成友
- トーマスマンと其の時代(一) 慶應義塾 大學教授 高橋誠一郎

#### 雜錄

- 歐洲戦争と英國對外放資 シー、ケー、ホボソン
- 消費の順序並に限度に關する原則及び其の行はるゝ結果に就て(上) 増井 幸雄
- 英國の聯立内閣 マスター、オ、ブ、アー、ツ 山崎 宗直
- 第十九世紀に於ける獨逸經濟 山崎 宗直
- 發達の一斑(三) 商學士 高島佐一郎
- 「經濟政策」に關して再び松崎壽氏に答ふ 京都帝國 大學助教授 山本美越乃
- 米價調節審査會の設置に就て(下の甲) 高城仙次郎

#### 批評と紹介

ルロアボリユー氏著「佛英獨に於ける租税と所得」

#### 編輯主任

堀江 高城仙次郎

一冊定價 金二十二錢 郵税金壹錢五厘

一ヶ年前金 金二圓四十錢 郵 稅 共

編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛

營業に關する用件は發賣元宛

原稿締切期日は發行の前月十日限

大正四年九月三十日印刷納本

大正四年十月一日發行

每月一回一日發行

東京市芝區三丁目三番地慶應義塾内

編輯兼發行所 石田 新太郎

東京市赤坂區新坂町五十九番地

印刷所 金子 榮太郎

東京市赤坂區新町五丁目四十四番地

印刷所 金子 活版所

發賣元 東京市麴町區有樂町一丁目一番地

振替貯金口座東京二四二七番

電話本局二二二三二番

尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所 東京芝三田 慶應義塾内

理財學會